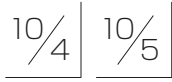


楽
曲
紹
介

解説=稲田隆之



ブラームス (1833-1897) ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op. 77

ドイツの作曲家ヨハネス・ブラームス(1833-1897)がこのヴァイオリン協奏曲に取り組むころ、作曲家として一番の充実期を迎えていた。1876年に、ベートーヴェンの継承者というプレッシャーをはね除けて交響曲第1番を大成功させ、翌1877年に第2番を一気に完成させた。ヴァイオリン協奏曲に着手するのはその翌年の1878年で、驚くことにヴァイオリン・ソナタ第1番、『大学祝典序曲』、ピアノ協奏曲第2番、ピアノのための「8つの小品」Op.76などの作曲をほぼ同時に進めている。

特にヴァイオリン協奏曲とピアノ協奏曲第2番はいずれも意欲作で、交響曲的な「4楽章構成」として構想された。本来「協奏曲」は独奏者の技巧披露のための作品であるため、オーケストラは独奏者の引き立て役として主に伴奏を担い、ときに独奏と掛け合いをする。しかしブラームスの構想では、独奏声部とオーケストラの奏でる音楽が、交響曲における楽曲構成のように緊密に結び合わされることが意図されたのである。

やがてヴァイオリン協奏曲の作曲が本格化すると、ピアノ協奏曲第2番の作曲は中断された。そして、その作曲に大きな影響を与えたのが、ブラームスと親交のあったヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムである。ブラームスは構想段階からヨアヒムに相談し、ヨアヒムも作品の完成まで、専門的なアドバイスを数多く与えた。

その過程で、当初の4楽章構成は伝統的な3楽章構成へと変更され、すでに着手されていたスケルツォ楽章は放棄された。1878年の12月下旬にはおおよそ作品は完成され、翌年1月1日にライプツィヒのゲヴァントハウスで、ヨアヒム

の独奏とブラームスの指揮により初演された。この作品がヨアヒムに献呈されたことは言うまでもない。

このヴァイオリン協奏曲は、ベートーヴェンやメンデルスゾーンらと並ぶヴァイオリン協奏曲の傑作であるだけでなく、ブラームスの全作品のなかでもとりわけ優れた傑作であると言っても過言ではない。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo、ニ長調、3/4拍子。冒頭は和音を分解した音型で始まり、続いてなめらかに音階をなぞった旋律が現れる。楽章全体は、これらの素材にさまざまな表情を与えられながら、組み立てられていく。終わり近くでヴァイオリン独奏のカデンツが挿入される。

第2楽章 アダージョ、ヘ長調、2/4拍子。ロマンティックな情感に満ち溢れた楽章で、奏でられるすべての旋律が美しい。

第3楽章 アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロppo・ヴィヴァーチェ、ニ長調、2/4拍子。リズムが際立つ舞踏的な楽章。

【作曲年代】 1878年 【初演】 1879年1月1日、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス
【楽器編成】 フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

サン=サーンス (1835-1921)

交響曲第3番 八短調 Op. 78 『オルガン付き』

フランスの作曲家カミーユ・サン=サーンス(1835-1921)は3歳で作曲を始め、幅広いジャンルに300曲以上の作品を残している。19世紀フランス作曲界の中心人物のひとりであったにもかかわらず、その作品のほとんどは激しい毀誉褒貶の渦に巻き込まれ、演奏頻度も決して高いとはいえない。若いころはシューマンやリストの影響を受けて前衛的と批判され、その後ワーグナーの影響を受けるとドイツ的だと批判された。今なお評価が難しい作曲家の一人でもある。

1870-71年の普仏戦争でのフランスの敗北は、サン=サーンスを含め、当時のフランス人作曲家たちにも大きな影響を及ぼした。敗戦直後にフランク、

フォーレらとともにフランス国民音楽協会を創設し、フランス音楽の振興を図る。当時のフランス人作曲家の多くがヴァーグナーに多大な影響を受けており、それに対する問題意識ともつながっていた。

1880年代に入り、ようやくサン＝サーンスへの評価も高まっていく。この交響曲第3番は、1886年にロンドン・フィルハーモニー協会の委嘱により作曲された。同年5月にロンドンで初演され、サン＝サーンスの作品としては最大の成功作となった。翌年のパリ初演も成功を収め、フランス音楽の勝利を告げる作品ともなった。しかし皮肉なことに、この交響曲第3番はフランス国民音楽協会と無関係であるばかりか、サン＝サーンス本人はダンディらとの対立から、パリ初演の前には当のフランス国民音楽協会を脱退してしまっていた。

さて、この第3番は「オルガン付き」の愛称で親しまれていることから明らかに、オルガンが使用されている。さらにはピアノも用いられており、優れたオルガニストやピアニストとしても活躍していたサン＝サーンスの特性がよく活かされている。また、オーケストラが大編成の箇所でも室内乐的な箇所であっても、実によく鳴る。優れた管弦楽法の宝庫といえるだろう。

だがそれ以上に優れているのは、循環主題と呼ばれる統一主題が全曲にちりばめられており、全体を緊密にまとめあげている点にある。その高度な作曲技法をドイツ音楽の精髓である交響曲に取り込み、そこにフランス的な精妙な響きを融合させた、サン＝サーンスの代表作となっている。なおサン＝サーンスはこの作品を、彼のオペラ『サムソンとデリラ』の初演を援助してくれたリストに捧げようとしていた。しかし、その直前にリストが亡くなってしまったため、スコアには「F. リストの思い出に」と記されることになった。

作品全体は一見古典的な4楽章構成のようにもみえるが、前半2楽章と後半2楽章を結合して、大きな2部分からできている。

第1楽章 前半 アダージョー・アレグロ・モデラート、ハ短調、6/8拍子。序奏で循環主題が予示されたのち、循環主題が主要主題として緊張感の高い楽章をかたち作る。

第1楽章 後半 ポーコ・アダージョ、変ニ長調、4/4拍子。3部形式。夢幻的なオルガンに乗せて甘美な旋律が歌われる。

第2楽章 前半 アレグロ・モデラート、ハ短調、6/8拍子ープレスト、ハ長調ーアレグロ・モデラート、ハ短調ープレスト、変イ長調。通常のスケルツォに当たる音楽で、巧みなリズムの組み合わせによって構成される。

第2楽章 後半 マエストーソ、ハ長調、6/4拍子ーアレグロ、ハ長調、2/2拍子。全曲を支配してきた循環主題が複雑に絡み合わされており、オルガンが活躍する荘厳で華やかな楽章となっている。

【作曲年代】 1886年 **【初演】** 1886年5月19日、ロンドン

【楽器編成】 フルート 3 (3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (シンバル、トライアングル、大太鼓)、ピアノ連弾、オルガン、弦楽5部

いなだ・たかゆき／武蔵野音楽大学准教授(音楽学)。博士(音楽学)。専門は西洋音楽史、特に19世紀ドイツ・ロマン主義音楽の生成とモダニズムへの移行に関する楽曲分析。ワーグナーに関する著書・編著のほか、論文・楽曲解説多数。最近の成果として「トリスタン和音」の再考(武蔵野音楽大学研究紀要)。